

儒学論集

儒学文化 第5号

巻頭言

儒学を考える

学校法人昌平黉 理事長

儒学文化研究所 所長

田久孝翁

「昌平黉」名体现 心不在 己不知

学校法人「昌平黉」、社会福祉法人「昌平黉」は共に一昨年（2002）母体校昌平中学校の下、創立100周年を迎えました。爾来一貫して教育指導目標である修為要領17ヶ条の精神に従い、福祉と教育、全人的指導教育の理念に基づいて、現代形社会教育の在るべき姿を考えてきたということを思いおこして見ると、昌平中学創立100周年の歩みは、決して他に誇るべきほどの歳月を要したものではありませんが、一定の役割を果たしてきたと思っています。

我が国の近代史の中で世界に誇る儒学文化の最盛期とも云うべき徳川時代約300年の歴史は、我々日本民族本来の在るべき姿を代表して、「他を犯さず、犯されず」ひたすら平和国家を築いてきたものであり、やがて来る明治維新と文明開化に翻弄された近代日本の100年史を思うとき、徳川時代の学問所として端を発した「昌平黉」の歴史とその存在の意義は、今改めてその真価を問われているのではないのでしょうか…。

と云うことは、徳川時代300年に亘る昌平黉の歴史は単なる学問所と云うだけのものには止まらず、国学としての立場から、政治、経済、文化と多岐に及び、国家的基本理念を形成してきた処に、徳川家康の思想的心情を伺い知ることが出来ると云うものであります。

こうしてあらゆる時制に関する物理について考査を続けて見る限りに於いて「名は体を現す」即ち昌平黉とは、その時その時代を代表する固有名詞を語るに相応しいものであることを申し上げると同時に、またその一方、時と処によっては、特に見聞の機会に恵まれない国や所（後進地）にあつては、知らざる処に利が有るような原理も存在して「己を知らず」と云うことにもなりますので、全てが不可と云う訳ではないことも付言しておかなければなりません。それが現代社会の偽らざる姿ではないのでしょうか。さりとて『論語』は偽らない。「己の欲せざる処、人に施すことなかれ」好むと好まざるとに係わらず真理以外の何物でもあり得ない。それが『論語』であるからであります。

『論語』が日本に伝来してより1718年、応神天皇の御代、百済の国（現在の朝鮮半島）からと云われておりますが、その後、聖徳太子による我が国初めての「憲法17ヶ条」の発布が604年、続いて640年代には大化の改新などなど、新しい文化の歴史は常に新たなる

扉を開いてきたことを物語る正に「温故と知新」。ここでも「名は体を現す」の所以であり
ますが、果たして日本人の全てが『論語』（儒学）に対する正当なる代償を払ってきたと云
えるだろうか。世上兎角の噂によれば、正当な代償を払わない処に、その効果を求めて然
るべきや。世界四大聖人の遺産（文学は果たして誰の為のものであったのか）。さすがの国
連に於いてさえ結論に及ぶ問題とも思われないが、一先ず孔子七十七代の直孫、孔徳懋女
史の真意を求めることは果たして如何がなものなりや。正に名は体を現すことを願って止
まない真理ではないでしょうか。